KSKP まねき猫通信　91ぴきめ　第３種郵便物承認　通巻 8504 号　2010 年２月１日発行　（1）

編集人：ぶくぶくの会　〒 564-0025 吹田市南高浜町 1-17-2A（総務）
TEL 06-6317-5598、FAX 06-6317-0936 Mail：so-mu@puku-2.com URL：www.puku-2.com
代表：馬垣安芳　編集長：上田かおり　1部 200 円
年間購読料：個人会員 2000 円　広報会員（３部）5000 円
法人会員１口（５部）10000 円　賛助会員（１部）10000 円
振替口座 00940-0-161341
「まねき猫通信」

まねき猫通信

91ぴきめ

題字：
塩澤 文男
（しおざわ・ふみお）

もくじ

震災 15 年－顔の見える関係が互いを守る　2
リレーエッセイ：地方から中央から－佐野武和　4
日本の「マザー・テレサ」武田紀さんを悼む－石塚直人　5
吹田の生き物と人－釈迦が池のカモ －　高畠耕一郎　6

笑う門には福来たる～

絵：つよしゆうこ

トリの眼・ムシの目・ニャンコの目

『十二人の怒れる男たち』を東京の俳優座劇場で見た。原作は50年代のアメリカ映画で、最近はロシアのリメイク版が話題になった。父親を殺した（とされる）少年の有罪が確定すれば死刑、物的証拠と証言の全てが「有罪」を証明している。12人の陪審員のうち、たった一人だけが「無罪」を主張する。「そんな簡単に人間の命を奪っていいのでしょうか？　私に無罪の確信があるのではなく、もっとここで話し合いたいだけなのです。」長時間にわたる議論の末、最後には全員が「無罪」を主張する。「合理的疑いがある場合、有罪とは言い難い」この一点を、各人が各人の納得の下に確信していく過程が熱い人間模様に彩られて観る者を圧倒していく。静かな感動が場内を支配した▲観劇後、長妻昭厚生労働大臣が「障がい者の人間としての尊厳を傷つけたことに、心から反省の意を表明する」と述べたことを知った。障がい者自立支援法を「２０１３年までに廃止し新法を制定」するそうだ。ともかく一歩前進、新政権の面目躍如だろう。しかし、あと3年（足かけ4年）待つのか…その間「人間模様に彩られた静かな感動」が呼び起こされるだろうか？　鳩山さん、母さんから貰った9億円のお小遣い、ちょっと回してほしいなぁ。　（パギ）

顔の見える関係が、互いの命を守る

◀玉木幸則さん

阪神淡路大震災から15年

「普段の生活の中で、顔の見える関係を作っておくことが、災害の時にも命を守る」。倒壊した文化住宅の下敷きになりながら、奇跡的に軽傷で救出された玉木幸則さんの教訓です。玉木さんは、自立生活支援センター、メインストリーム協会副会長。震災直後から仲間の生活再建・自立支援に奔走しました。

仮死状態で生まれた玉木さんは、脳性麻痺で話し方や歩き方に障がいがあります。小・中学校は普通校に通ったものの、高校は不本意ながら養護学校へ。独学で日本福祉大学に進学し、障がい者甲子園など多彩な活動を展開してきました。NHK番組「キラッと生きる」にも出演し、「主張する障がい者」として、政策提言も活発に行う玉木さんに、震災の経験から見えてきたことをお聞きしました。

（文責・編集部）

アパートの下敷きに

編：まず地震の瞬間のことを話して下さい。

玉木：気がつくと体の上に天井がのっていました。自宅は、家賃４万円というボロアパートの1階。訳がわからず必死でもがいても、起きあがれません。

▲床下のように見えるのが、玉木さんの居室。これで軽傷は奇跡。

そんな時、「どうしよう、家が潰れた」という2階の住人の声がすぐ上から聞こえて、2階が体の上に落ちてきたとわかりました。弱々しい声で「助けてくださ～い。ここにいます」と叫んでいた私の声が、脳裏にこびりついています。ちなみに隣の部屋の学生は、即死でした。

妻は、ちょうど特別養護老人ホームの泊まり勤務でした。帰ってアパートを見た妻は、私は死んだと思ったそうです。

幸い2時間後に救助されました。アパートの大家さんが「埋まっているはずだ」と近所の人に声をかけてくれたそうです。近所に倒壊家屋がほとんどなかったため、地域の人々が総出で、ノコギリ・スコップを持ち寄って掘り出してくれました。

あらためて日頃のつき合いの大切さを痛感しました。というのは、大家さんとは、結婚する前から月に1度は家賃を支払いに行く時に世間話をしたり、畑で獲れた野菜を分けてもらったりという、つき合いがあったからです。地域に顔の見える関係があったことで、私は救われたのだと思います。

美しい「避難所の助け合い」？

家を失った私たち夫婦は、中学校の体育館に避難しました。でも震災当日は、弱肉強食の世界そのものでした。マスコミで報道された「避難所での助け合い」という美談は、避難所が、ある程度落ち着いてからのことです。人は、極限状況に追い込まれると自分のことしか考えられなくなるのでしょうか。

震災当日は、余震も続いていましたから、家が倒壊していない人も、みんな避難所に集まっていました。

私たちが避難所に着いたのは夕方でしたから、奥の方しか空いていません。トイレに行くのにも「すみません」と気をつかいながら、入り口に辿り着く状態で、トイレも我慢しなければなりませんでした。

私は、家が潰れ、食べるものもなく、パジャマに毛布1枚で寒さに凍えていました。しかし、家がある人たちは、布団や電気ポットなどを避難所に持ち込み、カップラーメンなどを食べていました。

そんな中で、夜中の11時頃、初めての救援物資＝おにぎりが届いたのです。まず、子どもに配られましたが、後は早い者勝ちみたいになりました。

結局、元気で動きの速い人がおにぎりを掴み、障がい者やお年寄りが我慢する、といった状態となりました。私は、到底無理だろうとおにぎりは諦めて、この光景を妙に冷静に眺めていたことを覚えています。

悲しい思いをしましたが、これが日本社会の縮図のようなものだったのかもわかりません。

名古屋に避難して募金活動

トイレも我慢しなければならず、とにかく寒かったので、メインストリーム協会代表のマンションに行ってみました。家の中は滅茶苦茶でしたが、何とか住める状態で、トイレと服を借りに行ったのですが、「ここに居たら」と言ってくれたので、リビングで避難することになりました。ホッとしました。暖かさが違うし、人ごみがなく静かだったからです。

一息ついて、仲間２人と名古屋に行くことになりました。名古屋市にあるＡＪＵ自立の家の山田昭義さんたちが、市営住宅を確保し、避難生活をしながら支援要請活動をする準備を整えてくれました。２週間の滞在期間中、募金を中心に活動し、崩壊した事務所の再建費用にしました。

障がい者の生活再建とは？

大震災の後も日本各地で様々な災害が起きていますが、私たちが体験したことで、２度と繰り返してはいけないことが幾度となく繰

り返されています。
避難所や恒久住宅の整備などにかかわる様々な問題がくり返し立ち現れてきています。
それは、この社会が誰でも対等に生きていける社会では、ないからです。例えば1次避難所となる学校です。いまだに予算がないという理由で建物のバリアフリー化はなされていません。車イス教師の存在が当たり前になれば、建物も変わるし、生徒や地域の障がい者への見方も大きく変わるでしょう。
障がい者が分離されることなく学校に通っていれば、知的障がいや多動の子どもが、興奮して避難所で騒いだとしても、「○○君はあれが当たり前やねん」と友達が周りに説明すれば、了解される話なのです。そうした日常生活で顔の見える関係が作られていないから、障がい児が奇声を発したり騒いだりすると、疎外が始まり、家族共々避難所に居り辛くなるのです。
残念ながら現在の日本社会は、未だに統合教育が実現していません。知らないから、気持ち悪いとか特別扱いする差別が生まれるのではないでしょうか。日常生活の中で障がいの特徴を知っていれば、その特性にあった配慮や措置もみんなの納得が得られるはずです。
本当の意味でのインクルーシブな社会を目指さないかぎり災害が起きた時には、1次避難所にも行けない被災者を、今後も生み出し続けると思います。

▲１階は完全に潰れた。
２階が１階のように見える。

福祉の枠を越えて多面的なつながりを

編：では、顔の見える関係を作るために、どんな日常活動でなければならないのでしょう？
玉木：これまで自立生活運動は、まず個人としての意思と生活が保障される社会環境を求めてきました。しかし、ある程度自立生活の環境ができた今、問題になっているのは、社会的な関係の狭さです。地域の人との関係が薄いために、昼間ずっとテレビを見て過ごす障がい者も増えています。
問題は、自立した先の関係の広がりです。福祉関係者と当事者だけの関係を越えて、どう広げていくか？が問われています。西宮で私は「地域自立支援協議会」の会長をしています。ここに、不動産関係者・商工会議所・教育関係者も集まってもらい、福祉関係者を越えて様々な人が、多面的なつながりを作ろうとしています。
例えば住宅を借りにくいという問題は、障がい者だけの問題ではありません。高齢者も外国人も母子家庭も同じ問題を抱えています。必要な人に必要な居所を供給するにはどんな仕組みが必要なのか？を、その考え方から摺り合わせしています。
遅々とした歩みですが、こうした積み重ねが、自分にできることだと思い定めています。
忘れてならないことは、「災害時要援護者」（いわゆる災害弱者）といわれている人たちは、災害がなくても生活を送っていく上で「支援」が必要であるということです。私は、「弱者」という言葉は好きではないのですが、ノーマライゼーションの理念が浸透していないから「障がい者」は特別な存在で、いつまでたっても「弱者」であり続けているのです。
地域には、いろいろな立場の人が生活していることが当たり前であり、そのいろいろな立場の人が、人権が守られ、安心して生活できる地域として成熟していくことが、真のノーマライゼーション社会だと考えています。そういう社会になれば、どんな災害が来ようとも障がい者の自立生活も揺らぐことはないと思います。

生かされているだけ?の障がい者

入部香代子

玉木さんは、「70 年代の告発型の障がい者運動は必要だったと思う。本当に殺されるんだから。今は、仕組み作りに当事者が入り、主張する。誰もが、それぞれの役割を果たすことが大切」と熱い思いを語ってくれた。
阪神淡路大震災の体験を通して語る彼の言葉には、説得力がある。非常事態の時には、顔見知りでないと、いくら障がいのことを説明しても、「みんな自分のことで必死になるので、わからないのが現実だ」と、玉木さんは率直に振り返る。
さらに「多くの障がい者は、生きているのではなく、生かされているだけだ」と、玉木さんは言う。障がい者自立支援法は悪法だが、その理念は、当を得ている部分もあるという。地域で生活はしているものの、外に出ない者、遊んでいる者など、地域との関わりがないところで生活をしている障がい者を目にするからだ。
日頃、私も感じていたことだ。ディ・サービスひとつ取っても、お遊びであって外の世界とは繋がっていないし、グループホームは入所施設化している。ホームから地域へと飛び出せない。また、自立していると言っても、人間関係は福祉関係の健常者（ヘルパー・親たち）に限られている。同じ顔に囲まれるのは、病院か収容施設ではないかと真剣に考える時がある。そんな中で障がい者は差別にぶつかっても、自分で乗り越えることが難しくなる。
障がい者が地域生活ができる制度は、徐々にできてきた。これは、今までの運動の成果だと信じているが、介護者に囲まれて昼間は作業所に通う。こんな状態が何 10 年も続くのだろうか？ 障がい当事者がひとり一人の役割を見つけ、どこへ行っても障がい当事者がいるような社会に１日も早くしていきたい。
その仕組みをつくっていくのは私たちだ。結局地域で普通に誰にも遠慮しないで生活できる仕組みができていないのが原因だとも言える。
個々の差別意識が克服されない限り、社会も人を大切にしないだろう。それは、震災の時のように極限状態になると顕著に現れる。誰もが大切にされる社会をめざして、がんばろう！

当事者リレーエッセイ

地方から中央から

ぽてとファーム

佐野武和

冬になると雪が降り積もる地域に暮らしている。地球温暖化の影響を受けながらも、今年も大雪警報が発令されるほどの雪に見舞われた。どっかりと雪が降らなければ夏に田んぼの水が涸れると教えられてきたが、連日除雪に追われるとへとだ。もういいと誰もが雪に恨みをぶつける。車椅子で雪道によって行動が制限されるとなおさらだ。雪の降らないあったかな地に移住したいと真剣に考えるのだ。

▲フォークリフトで地域道路の除雪。

実は私の働く事業所では駐車場の除雪の前に地域の道路の除雪を優先する。7年前この地域に建物を建てるとき地元住民の反対を受けた。いわれなき危険排除の意向を露骨に伝えられ、6回も地元事業説明会を開いたのだった。だからこそ地域に溶け込み、貢献する障がい者就労センター「ぽてとファーム」をアピールする絶好のチャンスとばかりに、地域道路の除雪をかってでる。幸いフォークリフトを所有しているため、スコップを寄せ付けない威力だ。先日地域の有志の方からお礼の「モナカ」が30個届いた。

「差別禁止条例」の制定を

さて中央の内閣府の「障がい者制度改革推進会議担当室」の室長に、熊本の弁護士でJ－L（全国自立生活センター協議会）人権委員会委員長の東俊裕さんが抜擢されたことは衝撃的な出来事だ。ほんとに驚いたしチャンスが来たなとうれしさがこみ上げている。しかし喜んでばかりではいられない。旧態依然の力関係でまたもや絵に描いたもちのような制度が闊歩しないように、東さんを底支えする必要がある。地に着いた地方からの発信をまとめ上げ、これから始まる制度改革に血が通うようにするのが私たちの責務だ。おいらを陰の秘書と呼んでと東さんに伝えたら、「瞬間湯沸器のようにすぐにカッとなるな」と釘を刺された。

地方で始められることがある。そのひとつが県民運動としての「差別禁止条例」の制定だ。千葉や北海道で制定され愛知や熊本で活動が進んでいる。これまで受けてきた差別や障がいを理由にいやな思いをした事例を集めることからはじめたい。障がいの種別を越えて共感でき、広く県民にも広がりを持てる運動を始めたいと思っている。雪解けはまもなくだ。

今年、日本全国で127万人の男女が「成人の日」を迎えたそうです。この新成人の数は、統計上最多だった昭和45年の246万人からほぼ半減した格好となり、130万人割れとなりました。少子化の深刻さをまざまざと物語っているかのようです。

このような日本の現状とは別に、世界的に見ると人口の増加が懸念されています。現在の人口約68億人が、2050年には92億人にまで増えると予想されています。その増加のほとんどが、大幅な経済成長の伸びが期待されている中国やインドなどの新興国となっています。

こういった人口爆発を背景にした形で今後問題になってくるのが食糧危機問題です。皆さんご存知のとおり、日本の食糧自給率は40％で、私たちの食卓を彩る食べものの60％を海外からの輸入に頼っているのが現状です。戦後の高度経済成長期を経ながら、低下の一途をたどっている日本の食糧自給率なのですが、果たしてこのような現状のままでいいのでしょうか。「好きなものを食べ、世界各国との貿易、交流に繋がればいいのでは？」というような声も聞こえてきそうなところですが、少し立ち止まって考えてみて下さい。

安心できる食生活を手にするために

どうする？ 食糧自給率

他国に依存しない食糧生産

関西よつ葉連絡会・淀川農地直送センター　奥野和夫

現在地球規模での環境破壊（森林伐採などの砂漠化）や温暖化の影響（エルニーニョ現象などの異常気象）が深刻さを増してきており、不安定な食糧生産となっています。昨年でいえば、東南アジアの水田を豪雨が直撃、反対にインドやアフリカの農地では干ばつが襲いました。また輸出大国であるオーストラリアやアメリカなどでも望まれるだけの収量が上がっていないのが恒常的になってきています。今後人口増加に見合うだけの食糧生産が追いつかなくなり、安定的に需要と供給のバランスが保たれるのかが心配されているのですが、世界各地で引き起こされた食糧危機での暴動や政情不安のことを鑑みれば、自国の食糧供給を優先するのは至極当然のことだと思います。そうなると食糧自給率の低い、私たち日本人の現在の食生活を維持するのは困難となるのは明らかで、いかに他国の情勢等に左右されない形での食糧生産がやれるのかが今後の焦点となっています。

日本は今、不景気とは言うものの世界的に見れば生活水準が高くて、モノが溢れかえっている状態です。このような時ではなかなか実感が湧かないのも分かるのですが、中長期的な視野に立った上での今後の日本の農業政策全体の変革を、現在の政府に望んでいきたいものです。